大阪府立
槻の木高校

統一した指導の実現

分掌中心の「4室体制」で学習指導と生活指導を両輪とした指導を実現

◎2003年に大阪府立島上高校と大阪府立高槻南高校の統合整備により開校。教育方針は「学習活動の重視」「規範意識の確立」「自主自立の精神の育成」「国際理解教育の推進」。国際交流にも力を入れ、オーストラリア、タイ、韓国の高校と姉妹校提携を結ぶ。

設立
2003（平成15）年

形態
全日制／普通科単位制／共学

生徒数
1学年約240人

13年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、金沢大、名古屋工業大、滋賀大、奈良女子大、大阪大、大阪教育大、神戸大、広島大、首都大学東京、滋賀県立大、大阪府立大などに30人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大などに延べ466人が合格。

住所
〒569-0075
大阪府高槻市城内町2-13

電話
072-675-2600

Web Site
http://www.osaka-c.ed.jp/tsukinoki/

変革のステップ

背景
◎府立2校の統合整備により開校。単位制など母体校との制度の違いの調整が課題に
STEP 1

実践
◎生活指導の徹底と共に、分掌を中心とした独自の組織の構築により、学校全体で学習・生活指導の足並みをそろえる
STEP 2

成果
◎生活指導面で地域から高い評価を得る。学習指導の充実により、進学実績、入試倍率共に好調を維持。教師の意識統一が進む
STEP 3

母体校との制度や活動の調整の中で学校づくりがスタート

「おはようございます」

整然と走る自転車が次々と校門に吸い込まれ、さわやかに制服を着こなした生徒たちが、立ち番指導の教師と挨拶を交わしながら校舎へ入っていく（**写真1**）。大阪府立槻の木高校のいつもの登校風景だ。8時5分を境に人影はなくなり、やがて昇降口前は教師だけとなる。こうした生徒の様子は、地域から高い評価を受け、他県から視察に訪れる教育関係者も多い。

同校は、2003年に府立2校の統合整備により開校した普通科単位制高校だ。生徒は規律正しく、落ち着いた雰囲気だが、統合後の2年間は、母体となった学校と槻の木高校の生徒が同じ校地を共有していたため、母体校と新校とで教育活動を調整して行わなければならず、慌ただしい日々が続いた。更に、「単位制」について、地元中学校へ手分けをして説明して回ることもしばしばあった。開校時に赴任した生活指導室長の奥谷彰男先生はこう振り返る。

「単位制の学校は、大学のように自由な雰囲気で好きな科目だけを勉強するというイメージが広まっていました。私服で一足制の母体校の生徒と、制服で二足制の新校の生徒が同居する中で、新校としての方針、文化を確立し、正しい姿を伝えることが必要でした」

大阪府立槻の木高校校長
平野裕一 ひらの・ゆういち
教職歴29年。同校に赴任して1年目。「生徒の成長を第一に、緻密かつ大胆であり続けること」

大阪府立槻の木高校教頭
浅田和也 あさだ・かずや
教職歴27年。同校に赴任して11年目。「しなやかな心で、したたかに動く！」

大阪府立槻の木高校
山本 尚 やまもと・ひさし
教職歴31年。同校に赴任して9年目。首席・学校運営室長。「分かれ道では迷わない」

大阪府立槻の木高校
奥谷彰男 おくたに・あきお
教職歴31年。同校に赴任して11年目。首席・生活指導室長。「常に明るく颯爽と！」

大阪府立槻の木高校
片岡弘典 かたおか・ひろふみ
教職歴29年。同校に赴任して5年目。学習指導室長。「志は高く、目の前のことは誠実に」

大阪府立槻の木高校
若林伸治 わかばやし・しんじ
教職歴35年。同校に赴任して6年目。学年室長。「感動することをやめた人は生きていないのと同じことである」

大阪府立槻の木高校
吉岡隆輔 よしおか・りゅうすけ
教職歴5年。同校に赴任して3年目。学校運営室。「人にやさしく、自分に厳しく」

校門で遅刻をチェックし チャイム前着席も徹底

まず、学校づくりの主軸に据えたのは生活指導だ。遅刻のチェックは教科担任が教室で行っていたため、生徒は始業ギリギリに教室になだれ込み、授業はざわついた雰囲気の中で始まっていた。そうした状況の改善に着手したのだ。

「学習指導の充実のためには、生活指導が基盤になると考えました。私が生活指導室長になった開校3年目に、毎朝、教師が正門に立ち、8時5分以降は全て遅刻にする方針を打ち出しました」（奥谷先生）

授業もチャイム前着席を義務化し、教師もチャイムが鳴る前に教室に入ることを申し合わせた。チャイムと同時に起立、礼をしてから授業に入るというスタイルが、全校に浸透した。

制服はシャツの第1ボタンまで留めるよう、身だしなみ指導も徹底した。「そこまでしなくても」という声もあったが、結果的に、生徒にはネクタイをきっちり結ぶ習慣も付いた。

指導の徹底により、遅刻は大きく減少した。13年度には、本誌の記事（12年10月号）をきっかけに学校訪問をした鳥取県立倉吉総合産業高校の取り組みを参考に、「入室許可・遅刻届出証」を導入。遅刻者は、教科担当、学年の生活指導担当、部活動顧問、生活指導室長にそれぞれ報告し、検印をもらった上で担任に提出して教室に入る。これにより、遅刻数が更に半減した。

写真1（上） 槻の木高校の登校風景。校門前の公道に教師2人が立ち、一般の車や自転車との事故がないよう生徒を誘導する
写真2（下） 若手教師の発案で生まれたシステム手帳形式の生徒手帳。学習計画や試験の予定なども書き込める

地域への広報活動を通じて 生活指導重視の方針を浸透

中学校や保護者への広報活動も積極的に展開した。中学校や地域の公民館を訪れて学校説明会を開き、中学生とその保護者、中学校や学習塾に「生活指導を厳しく行う」方針を繰り返し説明した。今も年間50回以上の学校説明会を開く。入学前に教育方針を中学生や保護者に浸透させることも生活指導の一環であると位置付けているからだ。学校運営室長の山本尚（ひさし）先生は次のように述べる。

「これまでの勤務校での経験から、こうし

た指導が良いのではないかと考えていた教師も多く、校内での意思統一は徐々に進みました。厳しい指導を前面に打ち出すことで、志願者が減るのではないかという不安もありましたが、実際には入試倍率は上昇しました。保護者だけでなく、生徒も落ち着いた環境を望んでいたのだと思います。真面目に勉強に取り組みたい、でも、周りから浮きたくないという生徒は大勢いて、彼らにとって、生徒全員がきちんとしていることの安心感は、大きな意味を持つのだと感じています」

生活指導の徹底は、厳しさを増す雇用情勢への備えでもあると浅田和也教頭は指摘する。

「社会では、身だしなみや挨拶などによっても人物が評価されます。社会に貢献したい、認められたいという気持ちは、どの生徒も持っていると思いますが、その実現のためには社会人として認められることが前提で、高校での生活指導は重要だと考えています」

授業進度、定期考査、週末課題を教科内で統一し、模試も活用

学習指導も試行錯誤の連続だった。発展的な学習を行っていた土曜講習（国語、数学、英語で毎週実施）は、5期生の頃から授業の復習と宿題の解説に充てるようにした。例年、1年生1学期には100人を超える参加者が、1年生秋までに20～30人に減っていたため、生徒のニーズに合わせたのだ。今は、1年生は8割、2・3年生は6割以上が参加する。更に、授業進度、定期考査、週末課題（国語、数学、英語）の内容を、教科内で統一したのも5期生の頃だ。

「本校は単位制なので、各教科の評価がそのまま卒業認定につながります。公平感・公正感が大切で、教師によって評価の仕方や試験の難易度が異ならないよう、教科内で足並みをそろえることにしました」（山本先生）

ベテラン教師の場合、自分なりの指導スタイルを持っているものだが、そうした個性はあくまで授業に反映させる。学習指導室長で国語科の片岡弘典（ひろふみ）先生は次のように語る。

「どの先生も指導にはこだわりがあると思いますが、それを試験で問うのは自己満足ではないでしょうか。私は、思い入れのあることは、授業で説明したり、物事を考える時の観点として示したりするようにしています。生徒には、公正かつ客観的な力を問う試験を課すことが大切だと思っています」

授業進度は週1回の教科会で調整。これは、若手教師の指導力向上にもつながっている。英語科の吉岡隆輔先生は次のように述べる。

「私は簡潔に教えた方がよい部分まで丁寧に教えすぎる傾向があり、進度が遅れてしまうことがあります。教科会では進度に加えて、指導の相談もさせていただき、授業力を高める上でも貴重な時間になっています」

週末課題は家庭学習習慣定着が主目的だが、あえて内容を統一し、使用ノートは学校名と校章を入れた「槻の木ノート」とした。ノート点検では、若手教師を中心にコメントも添える。

「皆が頑張っているから自分も頑張れるという生徒は大勢います。同じ内容なのだから頑張ろうという連帯意識を持って課題に取り組み、結果的に家庭学習習慣の定着につながることを期待しています」（平野裕一校長）

模試の活用にも力を入れる。進研模試は1年生から全員受験。意識の高まる進研模試実施の翌日曜日には1日勉強会を実施し、「受験は団体戦」という意識を低学年から醸成する。生徒は模試のやり直しをファイルし、教師も模試結果分析会を実施して、日常の指導に還元する。3年生では、管理職や3学年団を中心に20人ほどの教師で志望校検討会を行う。成績データと共に生徒一人ひとりの顔写真を投影し、第1志望と実現のための手立てを検討共有している。

分掌と学年をつなぐ「学年室」が教師の意思統一を促進

生活指導や学習指導など、学校全体で指導の足並みがそろう背景には、教師の意識の高さはもちろん、同校独自の組織の工夫にもある。鍵を握るのは各分掌と学年をつなぐ「学年室」だ。

同校の分掌は、「学習指導室」（教務、進路指導）、「生活指導室」（生活指導・保健指導）、「学校運営室」（総務、地域連携、ＰＴＡ）、「学年室」（生徒窓口、学級経営）の４室体制となっている。学習指導室、生活指導室、学校運営室が立案した企画を、各学年・担任団へ申し送るのが、学年室の役割だ。浅田教頭、学年室長の若林伸治先生、１～３学年主任の５人で運営する「学年室会議」で、分掌の決定を各学年の実態に応じた内容にして、学年主任から担任へと伝える。

「各分掌と学年をつなぎ、ある学年だけが違う方向に行くのを防いでいます。実現可能性も精査し、担任団の『スリム化したい』『内容を変えたい』といった意見を吸い上げ、各分掌と調整するのも役割です」（若林先生）

学年室には、異動してきた教師に学校方針や指導方法を伝える役割もある。学年室会議で定期的に学年間の意思疎通を行うため、成功事例を他学年に伝承していくことも容易になった。

「槻の木学習ｃａｎ-ｄｏリスト」による指導力の向上を構想

開校から10年を迎え、同校は生活指導では地域から高い評価を受け、入試倍率はここ数年、２倍前後で推移している。大学進学実績では、関関同立の合格者数が１００人を超え、国公立大合格者も２桁を確保している。そうした同校に、13年度に赴任した平野校長は「安定は衰退への入口」と警鐘を鳴らす。

「10年の節目は、学校にとって危険な年といわれます。今後は、現状に安住するのではなく、開校当初の精神に戻り、次の10年、20年先に向けた新たな取り組みを充実させていかなければなりません。特に、学習面の質の向上は重要だと捉えています」（平野校長）

現在、平野校長が考えているのは、教科ごとに生徒が身に付けるべき学力と、そのために必要な指導内容を明確にした「槻の木学習ｃａｎ-ｄｏリスト」の作成だ。各学期、各学年、あるいは卒業までに、学習指導を通して生徒が出来るようになることを明確にする。それにより、学校全体で指導力を底上げし、教師の異動があっても一定の教育水準を確保するのが狙いだ。13年度中に２回、学校全体で教科会を開き、これまでの学習を振り返るところから作成に着手する。平野校長は次のように決意を語った。

「これからの学習指導は、暗記中心の学習から生徒が自ら学ぶ学習へと転換していくべきでしょう。そのためにも、先生方一人ひとりが指導力を高め、『個人商店』ではなく『ブランドショップ街』にしていく必要があります。本校には、他校の視察も積極的に行い、既存の取り組みをより良くしていこうとする土壌があります。これからも理想を求めて、青臭く、愚直に進んでいきたいと思います」

若手教師が語る、指導変革への情熱

一歩、前に踏み出す力を身に付けさせたい

学校運営室　吉岡隆輔

本校に赴任して驚いたのは、先生方のフットワークの軽さです。新しい取り組みを始める時、不安や不満の声が先に出てしまう場合がありますが、本校では「どうすればより良いものになるか」という前向きな話から始まるのです。

ベテランや中堅の先生方が率先して動かれるので、生徒手帳の提案など（P. 25写真２）、若手教師も新しいことを提案しやすいのだと思います。今後は、私自身も積極的に周囲に働き掛けて、学校全体を活性化させる役割を果たしていきたいと思っています。

本校の生徒の一番の良さは、「頑張っている生徒が格好いい」「努力をしている生徒はすごい」と思う雰囲気があるところです。教師の指導を素直に受け入れる純朴さもありますが、その半面、少し難しい課題に直面すると尻込みしてしまうところがあります。「難しそうだけど、頑張ってやってみよう」というように、自ら一歩踏み出す力を付けさせることがこれからの課題です。

そのためにも、生徒の知的好奇心を刺激する授業を実践し、彼らが自分の殻を破れるように後押ししていきたいと思っています。最初から私が答えを教えるのではなく、ヒントを出して生徒の中から出てくるものを待つ姿勢も必要になるでしょう。生徒の潜在的な力を引き出せるよう、私自身も勉強を重ねて指導力を高めていきたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2012年2月号指導変革の軌跡「大阪府立八尾翠翔（やおすいしょう）高校」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME ＞ 教育情報 ＞ 高校向け